



Title	学生の家庭訪問に同伴して : 訪問したおばあちゃんより学んだもの
Author(s)	津村, 寿子
Citation	大阪公衆衛生. 1980, 43, p. 23-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

学生の家庭訪問に同伴して

—訪問したおばあちゃんより学んだもの—

大阪府立公衆衛生専門学校助教授
津村 寿子

今日は学生との家庭訪問日です。10年前より関節リウマチになり、その後大腿骨折し寝たきりになってしまった78才のおばあさんのところへ訪問しました。

「こんにちは、保健婦学生の〇〇です。今日は先生と一緒におばあちゃんのご様子を伺いに来ました」と学生があいさつすると、なかから「どうぞ、こんなむさ苦しいところに」とにこにこ顔中笑一杯のやさしいおばあちゃんの顔が見えました。このおばあちゃんは5人の子供のうち2人の子どもは生まれてまもなく死亡、3人の子供を育てあげ、今は娘夫婦のところにおじいさんと一緒に同居しておられます。娘さんの介護がいいのか、ベッドの周囲は清潔でよく整理され、おばあちゃん自身、座っていらっしゃる姿はどこが悪いかわからないくらいです。手もとにはテレビがリモートコントロールで見られるような設備があり、テレビも自分で番組を自由に選択して政治の事、時事問題、ドキュメンタリーなど見ておられます。

このおばあちゃんは、訪問されたのが嬉しいと言って自分の人生論を語ってくれました。ねたきりと思えないくらい表情は明るく、常に笑顔をやささないで楽しそうに話される姿にどうしてこんなに明るいのか不思議なことでした。

「私は、今、本当に幸せです。私は信仰をもっており、そこで感謝の気持で暮せば、心がなごみ、人生が明るく思われるようになる」と言われておりました。「以前は、子供をなくしたり、又病気になったりで、自分だけ何

故、こんな不幸になるのか、私はとても、ひがみ根生で、人生を暗く、不幸に思い、他人をねたむ事も度々でした。」と昔を思い出しては話してくれたのでした。私は、このおばあちゃんの話聞きながら、本当に考えさせられました。

「孤独」と「病気」と「貧困」の三つが老いをもたらすおそろしさと言われていますが、このおばあちゃんが感謝の気持で生きられるというも子供や孫達のあたたかいはげましとささえがあること、経済的にも安定していること、つまり「孤独」と「貧困」から解放されているのです。

昭和55年版「国民の福祉の動向」特集号によれば、わが国の老人問題は、老令人口の増加、家族制度の変革、核家族化の進展、扶養意識の減退、産業や就業構造の変化、住宅事情の窮迫等によってますます、きびしいものとなり、その複雑さを増してきている。と記されていますが、今一度考えなければならぬ事は老人は何を望んでいるか、老人の生きがいとは何かという事ではないでしょうか。

この間も老人クラブの集まりの時に、「老人の本当の生きがいとは何か、若い人はわかりますか」と言われました。その答えは、子供達に大事にされたい事ですとの事……。

よく生きがいをもつために、趣味をもちなさい、仕事をもちなさいと言われるが、余暇はヨカラヌ、額に汗して働く事を最上の美德とする時代を過ごしてきた人にただ趣味をもちなさいと言っても無理な面があると思います。ねたきり老人、独居老人の訪問を通して老人のねがいはまず、いつまでも元気でいたい。家族によって感情的にやさしくされたいこと、これが幸福感のもととなり、これが人生を明るく、感謝の気持で過ごせる活動力になっているんだと考えさせられました。